

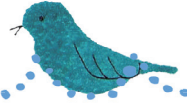


我孫子通信

文人の郷だより

令和2年4月号

特 別
通 信
号



辻説法

館長のつぶやき



第1回「流行感冒」

▶我孫子市杉村楚人冠記念館館長並びに白樺文学館館長の辻 史郎と申します。「辻説法」とは本来、「辻」すなわち人が多く集まる町角などに立ち、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。民俗学的には、「辻」は彼岸と此岸を結ぶ「橋」などと並ぶ「境界の地」であり、世俗の権力の及ばない場所とされ、「異界の入り口」として畏られました。またそれが故に辻には、漂泊し、拘束されない自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。と言う訳で、「辻」という、親から引き継いだだけの苗字の私ですが、二つの文化施設の長を勤めているのも何かの縁、この場をお借りして我孫子の歴史や文化についておしゃべりをさせていただきます。

▶現在の「コロナウィルスパンデミック」が1日も早く終息することを願うばかりです。今から100年ほど前の大正7（1918）年から9（1920）年のふた冬に渡って世界を震撼とさせたパンデミックがありました。「スペイン風邪」です。

▶第一次世界大戦の派兵のため訓練をしていたアメリカ国内の兵舎で、高熱を発する集団感染症が認められ、あっという間に学校や工場の寄宿舎に広まり、さらには兵士の移動に伴って港湾から港湾、都市から地方へと伝播しました。3～4日程度で熱が下がるものが多かったが、中には重症化して肺炎を起こして死に至る者も現れ、行政や交通がマヒし、工場が稼働できないなど社会的な混乱をもたらしました。「スペイン風邪」は現在、「インフルエンザ」と私たちが呼ぶもので、スペインで最初に報告されたことから名付けられました。別名「流行（性）感冒」です。光学顕微鏡では原因であるウィルスを特定できず、特効薬もなかったことから、体が弱い人、貧しく劣悪な環境に住んでいる人々には厳しく、全世界で4000万人以上、日本でも内地で45万人、外地で28万人の死者がありました（諸説あり）。

▶「流行感冒」と聞いて、志賀直哉ファンの方は同名の小説を思い出されることでしょうか。志賀直哉は大正4（1915）年、我孫子に定住し、同12（1923）年まで暮らしています。その間の同8（1919）年に発表したのが「流行感冒」です。まだ読んでいない方にはネタバレになるので詳しく申しませんが、流行感冒が我孫子でも拡がり、それを巡って「私」が心身ともに右往左往する物語です。小説中に「三、四百人の女工を使っている町の製糸工場では四人死んだというような噂」を耳にした、という記述があり、これ

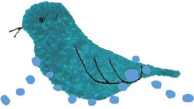
裏面へ続く…



テーマは「初めてのこと」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



主任学芸員のKより「初めてのこと」というテーマで書いてほしいということで、特別号に拙い文章を寄せる。

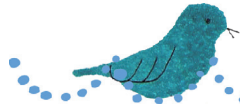
白樺文学館に勤務して早八回目の春が過ぎた。志賀直哉は八回目の春に我孫子を旅立ち、京都粟田口へと移住していく。(志賀直哉の我孫子滞在は一九一五(大正四)年九月〜一九二三(大正一二)年三月)今年、『白樺』創刊一一〇年であり、志賀直哉が我孫子に移住して一〇五年となる。それを記念して志賀直哉の子孫である山田家に伝来していた白樺派、民藝運動の人々の作品を四月から初公開する。山田家は元来薩摩藩士で、大久保利通にもつながる家系であるため、幕末明治維新期の書簡も含まれ、現在調査中である。来年二〇二二(令和三)年は志賀直哉没後五〇年、白樺文学館創立二〇年という節目である。白樺文学館が新たなスタートを切る二〇二二(令和三)年に向かって、今年初物づくしの企画展、イベントばかりを計画している。流行病が懸念されるが、いつでも来館出来る年間パスポートを購入いただき、度々我孫子に足を運んでいただくことを切に願うばかりである。Kに叱咤激励されながら締切直前に入稿する私が、締切よりかなり以前に入稿し、受領したことはKにとつて「初めてのこと」であろう。

「我孫子から」というタイトルは、柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した我孫子からの通信である。我孫子に来た一九二四(大正三)年、翌年、そして我孫子を去る一九二二(大正一〇)年の三回ほど書かれている。特に我孫子を去る時の文章は名文である。また私は学芸員ではなく楽藝人と自称(自嘲?)している。「楽しく藝術を語る人」であり、決して「楽しんで藝を披露する人」ではない。しかしながら、文学、美術、音楽など広く藝術を理解し触れていく時に、そう小難しく考えずに、「楽しむ」「気楽」な感覚から入ってほしい。白樺文学館では柳宗悦の妻兼子が晩年愛用したピアノによるBGM演奏も行っている。また毎月朗読・ピアノ市民スタッフによる「白樺の調べ」、楽藝人のトーク「稲村雑談」なども開催している。ちなみに、「稲村雑談」というのは志賀直哉の作品からの命名である。オチがつかない話は嫌いである。まさに落ち着かない。「そろそろやめてもいいコロナ」という最近の決まり文句を書き添えて『我孫子通信』特別号への寄稿とする。(稲村隆)

志賀直哉用紙



白馬城放語



フラグヒサア



倍

「白馬城放語」という題は、杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えたときに執筆した随筆からとりました。白馬城の由来は「白馬非馬」、詭弁を意味する故事成語です。ここには白馬は馬ではないと詭弁を弄するひねくれ者が住んでいるぞ、という皮肉家の自負を込めた命名です。本物の白馬城放語は、当時の土地制度のおかしさ、その制度に安住する地主の不埒を痛烈な皮肉でやっつけた随筆でした。しかし、このコラムは毎回お題を与えられるとのこと、まさか皮肉を誰かに投げつけてやっつけることはないでしょう。ただ、随筆・コラムの名手であった楚人冠に題だけでもあやかろうという魂胆です。

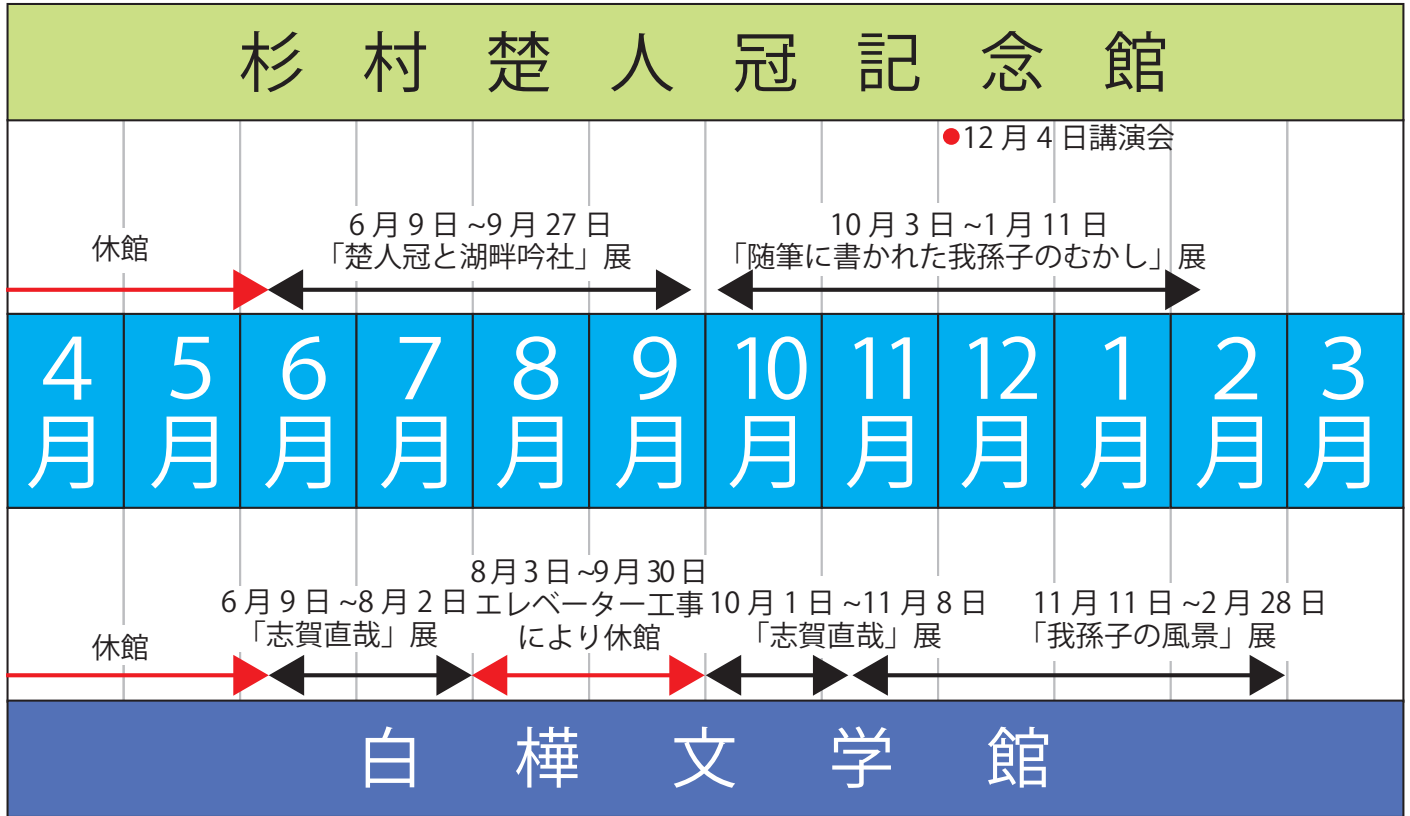
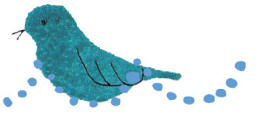
さて、今回のお題は第一号だから「初めてのこと」だとのこと。杉村楚人冠ほどかく「日本で初めてのこと」に縁のあるジャーナリストはいないでしょう。明治四一（一九〇八）年の朝日世界一周会は日本初の海外パックスツアー、大正一二（一九二三）年に創刊した『アサヒグラフ』は当初日本初の日刊写真新聞（震災後の立て直して週刊化）、IT技術の普及までは昔の新聞を読むのに欠かせなかった縮刷版、記事データベースの元祖といえる調査部、記事の質を高める記事審査部も日本初。すべてが楚人冠の発案です。

少し変わり種はスキーとの関わり。日本で最初にスキーが伝えられたのは、明治四四年の新潟県高田、（現・上越市）。教えたのはオーストリアの軍人レルヒ少佐、ここまではご存じの方も多いでしょう。楚人冠がそれとどう関わるのか？ 実は特派員として新潟県を巡回する途次、レルヒが指導していた陸軍歩兵第五八連隊を取材し、東京の人びとに最初にスキーの存在を伝えたのが杉村楚人冠、まぎれもないスキー普及の功労者の一人なのです。

これらの「初めてのこと」のなかから、来年春には、朝日世界一周会のとくに使ったガイドブックや地図も展示する企画展「観光案内と地図で見る楚人冠の旅 〈欧米編〉」を企画。一年先の話、ということは今回ご購入の年間パスの期間内にご覧いただけるわけです。皆様のお越しをお待ち申し上げます。（高木大祐）



イベント情報



■杉村楚人冠記念館

テーマ展示 我孫子市制 50 周年・我孫子を知る 1 年企画「寄贈資料展 楚人冠と湖畔吟社」
6月9日(火)～9月27日(日)

市制 50 周年を記念した教育委員会の事業「我孫子を知る 1 年」の企画。我孫子の住人のなかでも杉村楚人冠が最も大きく影響を与えたのが俳句結社湖畔吟社に集った人びとです。この湖畔吟社に縁のある方からの寄贈資料を展示します。

企画展 我孫子市制 50 周年・我孫子を知る 1 年 企画展「随筆に書かれた我孫子のむかし」
10月3日(土)～令和3年1月11日(月・祝)

※杉村楚人冠記念館では定期的に館内で資料の整理作業を行っています。

このため、令和2年度は以下の期間が臨時休館となります。

9月29日(火)～10月2日(金)



■白樺文学館

『『白樺』創刊 110 年記念 市制施行 50 周年記念 志賀直哉展—山田家コレクションを中心に—』
6月9日(火)～8月2日(日) / 10月1日(木)～11月8日(日)

志賀直哉の子孫である山田家寄贈資料の展覧会です。志賀直哉の子孫に伝わった初公開ばかりの資料から新たな志賀直哉の魅力に迫ります。

『『白樺』創刊 110 年記念 市制 50 周年記念 我孫子の風景展』
11月11日(水)～令和3年2月28日(日)

志賀直哉たち白樺派が去った後の我孫子は、原田京平を中心とする春陽会の若手画家たちによる風景を描く時代を迎えます。「我孫子・白樺派」を継ぐ者原田京平の我孫子の風景画を中心に、大正から昭和30年代までの我孫子の風景画を紹介する展覧会です。

※ピアノ演奏は、当分の間中止いたします。

※エレベーター工事の為、8月3日(月)～9月30日(水)まで臨時休館予定です。

そのため、志賀直哉展はエレベーター工事を挟んで開催します。

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お出かけの際は、お問い合わせやホームページで最新の情報をご確認ください。



は昭和60年まで我孫子駅南口で操業していた「山一林組（のち石橋生糸）我孫子製糸場」のことですが、身近なところで未知の病気で若い人々が亡くなる、というのは、幼子を亡くした経験のある志賀にとって「子供の病気に対する恐怖心は今から思えば少し非常識であった(本人談)」と言うくらいリアルな恐怖だったでしょう（岩波文庫『小僧の神様 他十篇』あとがき より）。

▶その一方で「流行感冒」に描かれるのは、「私」の恐怖に比して、人々が普通に「生」を楽しんでいる様子です。芝居見物という非日常を待ち望み、多少のことがあっても駆けつける人々のしたたかでのんびりした姿が、「私」の狼狽を浮かび上がらせる、という巧みな構図です。すごいな志賀先生！

▶さて、この「スペイン風邪」、人々の記憶から遠くなってしまったらしく、小説として取り上げているのは、有名なところで、志賀の盟友 武者小路実篤「愛と死」くらいかな？歴史人口学者の速水 融は、「スペイン・インフルエンザはなぜ忘れられたのか」、について、突然起こって2シーズンで終息してしまったこと、超有名な人が亡くなっていないこと（劇作家の島村抱月が亡くなり、絶望した女優の松井須磨子が後追い自殺を遂げた、というのが劇的な出来事）、大正12（1913）年に関東大震災という未曾有の災害が起きたこと、などから、大正デモクラシーと経済発展という変化の激しい時代の中で埋没してしまったのでは、と指摘しています（速水2006『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店）。

▶私が思うに、大正時代の人々にとって、最も脅威なのは「結核」であり、年間コンスタントに10～15万人の方が亡くなっています。それも不治の病であり、切実な問題でした。結核によって亡くなった著名人としては、正岡子規、二葉亭四迷、樋口一葉、石川啄木、堀辰雄、滝廉太郎、中原中也などがいます。武者小路実篤も結核と診断され死を覚悟した一人です（誤診でしたが！）。スペイン風邪は確かに脅威ではありましたが、結核に比べたら治る可能性も高く、それが故に忘れ去られたのかもしれませんが。第一に「風邪」というネーミングがそれを物語っています。

▶だからと言ってスペイン風邪が人々の心理や行動に与えた影響を軽く扱うべきではないと思います。志賀が「流行感冒」で描いた「非常識なほどの恐怖」がスペイン風邪や震災であり、「芝居見物の高揚」が経済発展や大正デモクラシーだとしたら、二つは糾^{あざな}える縄のごとく時代を構成していると思います。また、意識下に置かれた「死」が現実になるとき、不安との葛藤の中から新たな創造や文化が生まれるのだとしたら、戦争や震災と同じく大正という時代の姿としてもっと注視すべきでしょう。

▶ここまで書いてきて、杉村楚人冠について全く触れていないことに気がつきました（^^:）。紙数も尽きたので彼については次号で！（辻史郎）

五号雑感（編集後記）

●『我孫子通信』をお手に取っていただき、ありがとうございます。●『我孫子通信』特別通信号、いかがだったでしょうか。年間パスポート特典として、年4回『我孫子通信』をお届けします。●特別号は「初めてのこと」をお題にして両学芸員に書いてもらいました。3者それぞれの筆者の書き口から、こんな人？あんな人！ご想像いただきながら楽しんでいただけると幸いです。●隙間があったときは、我孫子の案内もできればと計画中です！（K）

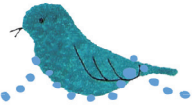


我孫子通信

文人の郷だより

令和2年夏号

特別
通信号2



辻説法

館長のつぶやき



第2回 通勤者そして田園生活者「杉村楚人冠」

▶先だって、約100年前の「スペイン・インフルエンザ（スペイン風邪、流行感冒）」に遭遇した志賀直哉の話を書きましたが、勢い余って紙数が尽きてしまい、我孫子のもう一人の巨人！ 杉村楚人冠について書けませんでした。今回は彼が遺した『楚人冠全集』から読み取ってみましょう。

▶白樺派の文人たちが我孫子に集っていた頃（大正3～12年頃）、杉村は東京の大森に住み、我孫子には別荘「白馬城」を設けていました。静謐な手賀沼を望む丘の上に「湖淡庵」と名付けた7坪半のコテージを建てました。また、およそ2万㎡に及ぶ土地には、自分好みの樹木（椿、桜、梅など）を植え込み、時間をみては我孫子に通い、ロシアみやげの「ルバシカ」を着て庭仕事を楽しましました。杉村は「別荘は家族の意向などを忖度せず、予算は特別会計で好きに作ることができる」と別荘の長所？を語っています。

▶その後、大正12（1923）年の関東大震災で2人の子どもを病院の倒壊によって失った杉村は、翌13年に現在の記念館となっている母屋を建てて、別荘地であった我孫子に移住しました。そのため、この母屋はいろんな地震対策が施された凄い建物なのですが、この話はまた別の機会です。

▶我孫子移住後の杉村は自分のことを「通勤ター」、すなわち「通勤者」と呼んでいます。当時は一日15本ほどしか走っていなかった常磐線の汽車に乗り、1時間15分ほどかけて、勤め先である銀座の東京朝日新聞社通勤し、新聞事業に尽力する一方、我孫子では田園生活を楽しんでいました（ちなみに現在、我孫子駅から東京方面の上りは千代田線乗り入れ各駅停車を含めて平日一日約350本、上野までは35分程度です）。相変わらず庭仕事、そして庭の一角に作った湯殿（離れ家の浴室）に、全国の名湯から取り寄せた「湯の華」や、友人の星一（小説家 星新一の父）から貰った星製薬の入浴剤を入れて楽しみ、湯上りにはビールや友人の三島海雲（カルピス創設者）から貰ったカルピスを飲むという贅沢！

▶また、杉村はのんびりした我孫子の人々の暮らし方について記しています。小さな町の人々がお互いによく知っていて、とにかく顔を見れば挨拶を交わす、お金の持ち合わせがないときでも後払いで良い、雨の時はどこでも傘を貸してくれる、という気持ちの良い面もあれば、物事がなかなか改善されないのがイライラすることもありました。このあたりは、大正7（1918）年の「流行感冒（スペイン・インフルエンザ）」に際して、志賀直哉は神経質に感染を警戒する一方で、あまり気にせずのんびり生活を楽しむ人々がいるこ

裏面へ続く…

とに対し、イライラする、ということにつながる話ですね（^^）。いずれにしても我孫子では細かいことには拘らず、ゆったりとした時間が流れていたようです。

▶ 杉村は自宅の書斎で仕事、今風に言えば「在宅勤務」することがあり、急ぎの記事を新聞社に送るときはとっておきの手段をとることがありました。それは…「伝書鳩」です！新聞社から貰い受けた伝書鳩を鳩小屋に飼い、鳩の脚に着けた信書管に原稿を入れて放鳥するとあっという間に東京の新聞社に届けたんだそうです。電子メールならぬ「鳩メール」といったところでしょうか。

▶ 杉村は言います。「田園生活とは都市生活と相対立するものに非らず」つまり、田園生活と都市生活は不可分のものだということです。忙しい日々の仕事や暮らしの中にのんびりした自然や人々の出会いがあることによって、癒され、働くことの意味を再確認できるのでしょうか。杉村が東京から程々の距離にあって、のんびりした環境が整う我孫子にいたからこそその発想だと思います。

▶ また杉村はこのようにも言っています「休むと休めるとは事が違う、と同じく、遊ぶと遊べるとも事が違う。」これは、自らの意志で時間を使う、ということが大切なのだ、ということでしょう。仕事の合間に庭仕事や散策など積極的休養をはかっていた杉村らしい言葉です。

▶ コロナの影響で、在宅勤務で仕事をコントロールすることの大変さ、オンとオフの使い分けなどに苦労された方々も多かったと思います。100年ほど前に仕事と休養を共に楽しんだ杉村の姿勢は、これからの仕事と家庭の在り方を考える上で興味深いです。

▶ 杉村の著作『楚人冠全集』のうち、当時の我孫子について記した『湖畔吟』『続湖畔吟』の現代表記版（注釈付）を刊行しています。大変読みやすい本ですので手に取ってご覧ください。おススメです。（辻史郎）

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

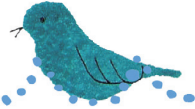
↓続き
 どうしても谷崎が愛したロールケーキを食べさせてあげたく、新幹線のチケットを予定より早めて我孫子に戻った。Kの素敵な笑顔に癒された。そしてこれ何かあった際の保険になるだろうと下心もあつたのかもしれない。
 こうして綴ること
 で、ようやく私は落ち着くのである。志賀も見聞、経験したことを綴ることが多かった。転地↓湯治↓執筆が志賀の健康法といえるのかもしれない。（稲村隆）

五号雑感（編集後記）

●今回の『我孫子通信』が創刊号となっています。いかがだったでしょうか。年間パスポート特典として、年4回『我孫子通信』をお届けします●今月号はコロナウイスのこともあり、「文人たちの健康法」をお題にしました。さすがは戦前の文豪、想像どおり、健康になるため努力している様子が伝わってきます。いまもむかしも変わらないところで彼らを身近に感じるのでは？●次回は10月号、お題は決まっていますよ♪ヒントは今月のコラムから（K）

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



健康とは何だろうか。世界保健機関(WHO)憲章(一九四六(昭和二十一年)には次のようにある。「健康とは、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない。」

武者小路実篤は、肺結核という診断を受けて東京から我孫子へ移住する(なお後に誤診とわかるが、そのまま住むことになる)。志賀直哉と交流のあった画家原田京平も我孫子への移住は療養生活だった。我孫子を訪れる文人たちには、手賀沼畔は、健康を取り戻すためのオアシスだったのかもしれない。

柳宗悦で思うことは、やはり民藝の心である。「健康の美」という言葉がある。「人は十分健康である時、健康を特別意識しない。健康はそれほど健康なものだとも云える。健康が意識されるのは病気に在るからと説くことが出来よう。健康は最も平易な尋常な境地である。「中略」健康は生理に於ても、道德に於ても、社会に於ても、美学に於ても、当然基準となるべき原理でなければならない。」(「健康性と美」『柳宗悦全集』第九巻)生活に根差した美の在り様。柳はまさに民藝というものを通じて、健康を目指していたのだろう。

志賀直哉はやはり「転地療法」「湯治」だろうか。志賀は自ら「転居二十三回」と書くほど転居している。例えば、松江行きの理由を「神経衰弱気味」のためと記している。「湯治」といえば、やはり「城の崎にて」である。他にも我孫子在任期には、坐骨神経痛の治療のために、草津温泉へ出かけている。

かく言う私も志賀を見習い「転地療法」「湯治」を兼ねて、柳が見出した「民藝」ゆかりの地、白樺派ゆかりの地など全国津々浦々訪ね歩いていく。流行病の影響により自粛しているが、そこにこの梅雨入り。楽藝人は高温多湿が大嫌い、こういうときこそ旅に出たくなるのだが、今は記憶の旅でつかの間の癒しを得たいと思う。

四年前の六月、原田京平の調査で一週間ほど出身地である静岡を見て回った。刺激的な旅であったため、最後は熱海で途中下車して疲れを癒した。熱海は志賀ゆかりの地、谷崎潤一郎ゆかりの地でもある。主任学芸員のKに、↓最後のページへ

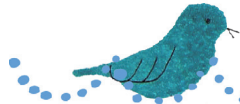
志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

すべて健康法というものは、ただちよつと思いついた時だけ二十分なり三十分なり行って、それで宜いというべきものではありません。真個の健康法はこれを一身に体得して、行住坐臥尽くそれでなければならぬ。

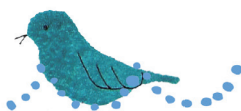
ありとあらゆる三日坊主がひれ伏すほかないこの言葉、私が言っているんじゃないやありません。楚人冠先生が、そう言っているのです（『楚人冠全集』第十六巻所収「健康法所感」）。一身に……だとか、行住坐臥尽く……だとか大げさな、と思うかもしれませんが、楚人冠の健康法の要諦は「呼吸」にあるので、「行住坐臥」も決して誇張ではありません。

楚人冠はなぜ「呼吸」に注目したのか、それは二十九歳のとき、肺炎はいせんカタルに罹ったためです。肺炎カタルは肺炎部に起こる結核性炎症で、当時は肺結核の初期症状と考えられていました（現在の説は支持されていません）。楚人冠は自分が肺炎カタルになる前に、親友古河勇「筆名 老川」や恋人を結核で亡くした経験がありました。しかし、このときにはもう結婚し、折しも子どもも生まれたばかり。なんとか肺病を克服してやろう、と思うのは当然のことだったでしょう。たどりついたのはアメリカのベークマンが提唱した「強肺術」。横隔膜を動かす腹式呼吸を日常的に行い、また胸郭を動かす筋肉を鍛えるため「胸式呼吸」も練習する、というものです。楚人冠が興味を持った理由は、白隠はくいん禅師の内観の秘法に似ているから。こちらは、鎌倉円覚寺に参禅した際、試してみたことがあったので、それと似たベークマン式の呼吸法なら取り組みやすかったということでしょうか。じつと座って呼吸を整え雑念を押さえる座禅の方法が、肺を強くする呼吸法と似ているというわけです。そして、楚人冠によればそれで内臓の運動はできているのだとか。

なるほど、これなら座ってできる健康法なので、日常的に実践するのは場所が必要なスポーツよりやりやすそうです。しかし、我ら凡夫の身には雑念を押さえるのが一番難しい……、ほら、言っているそばからやらなきゃいけないことを思い出して呼吸が乱れてきましたよ。（高木大祐）



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
6月9日~9月27日 「楚人冠と湖畔吟社」展			10月3日~1月11日 「随筆に書かれた 我孫子のむかし」展				11月29日楚人冠講座 ●12月6日講演会 1月13日~3月7日 「てがみ展 楚人冠の交友関係」				
7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
8月3日~ 9月30日 エレベーター工事 により休館			10月1日~ 11月8日 「志賀直哉」展			●12月12日講演会 11月11日~2月28日 「我孫子の風景」展					
白樺文学館											

■白樺文学館

(6月から開催中) 11月8日(日)まで

『白樺』創刊110年記念 市制施行50周年記念「志賀直哉展—山田家コレクションを中心に—」

志賀直哉の子孫である山田家寄贈資料の展覧会です。志賀直哉の子孫に伝わった初公開ばかりの資料から新たな志賀直哉の魅力に迫ります。

※エレベーター工事の為、8月3日(月)~9月30日(土)まで臨時休館予定です。

11月11日(水)~令和3年2月28日(日)

『白樺』創刊110年記念 市制50周年記念「我孫子の風景展」

志賀直哉たち白樺派が去った後の我孫子は、原田京平を中心とする春陽会の若手画家たちによる風景を描く時代を迎えます。「我孫子・白樺派」を継ぐ者原田京平の我孫子の風景画を中心に、大正から昭和30年代までの我孫子の風景画を紹介する展覧会です。

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時~か13時~どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は35名。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧いただけます。

※7月7日(火)より再開予定です。

朗読・ピアノイベント「白樺の調べ」

参加費:無料(入館料のみ)

白樺派に魅せられた朗読・ピアノ市民スタッフと、学芸員がお送りする小劇場。

※当面の間、開催を見合わせます。



学芸員（楽藝人）ギャラリートーク「稲村雑談」

参加費:無料（入館料のみ）

志賀直哉の熱海での雑談記録「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説です。

※当面の間開催を見合わせます。

講演会 12月12日（土） ① 10時30分から ② 14時から 生涯学習センターアビスタホール

市制50周年・我孫子を知る1年「稲村雑談 我孫子を描きし画家 原田京平を語る」 参加費:無料（要予約）

講師 稲村隆（白樺文学館学芸員） 予約等詳細は次回会報をご覧ください。

■杉村楚人冠記念館

6月9日（火）～9月27日（日）

テーマ展示 我孫子市制50周年・我孫子を知る1年企画「寄贈資料展 楚人冠と湖畔吟社」

我孫子の住人のなかでも杉村楚人冠が最も大きく影響を与えたのが、俳句結社湖畔吟社に集った人びとです。この湖畔吟社に縁のある方からの寄贈資料を展示します。

10月3日（土）～令和3年1月11日（月・祝）

企画展 市制50周年・我孫子を知る1年「随筆に書かれた我孫子のむかし」

杉村楚人冠が書いた随筆は、我孫子のむかしを教えてくれる貴重な記録です。随筆を手掛かりに、田植え、麦蒔き、鴨猟などを、民具とともに振り返ります。我孫子の民具展示は久しぶりです。ご注目ください。

楚人冠講座 11月29日（日） 10時から アビスタ第2学習室

市制50周年・我孫子を知る1年『湖畔吟』を読む

参加費:無料（要予約）

杉村楚人冠の随筆『湖畔吟』を杉村楚人冠記念館学芸員による解説付きで読みます。予約等詳細については、次回会報をご覧ください。

講演会 12月6日（日） 14時から 生涯学習センターアビスタホール

市制50周年・我孫子を知る一年「行商の時代」

参加費:無料（要予約）

講師 山本志乃氏（神奈川大学国際日本学部教授）

かつて、常磐線や成田線には行商のおばちゃんたちの姿がありました。中心地の一つが湖北村（我孫子市湖北地区）。市制50周年を機に、行商や市に詳しい山本志乃さん^{いち}にお願いし、全国の行商のむかしといま、そのなかでの湖北の行商の特徴についてを伺います。

■2館共通のお知らせ

YouTubeで白樺文学館と杉村楚人冠記念館の魅力を伝える番組を配信します！

我孫子インフォメーションセンター「アビシルベ」のYouTubeチャンネルで我孫子の魅力を紹介するために、「我孫子を愛した文人たち」と題しシリーズ化し動画を配信します。

また、閉館中に予定していた対談を「稲村雑談特別版」として収録しました。タイトルは「ふたりのナオヤ 志賀直哉と山田直矢」。こちら併せて配信予定です。お楽しみに！！

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。



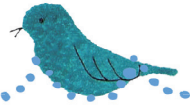


我孫子通信

文人の郷だより

令和2年秋号

通信第一



辻説法

館長のつぶやき



第3回 武者小路実篤と「ヨヂミ」

▶武者小路実篤は大正5（1916）年から7（1918）年にかけて志賀直哉が所有していた我孫子市根戸の土地を融通してもらい、家を建てた…その顛末は武者小路が大正5年に記した「新らしき家」に記されている。

▶内容の概略を記そう。武者小路は寝ちがいからかひどい肩こりなり、それを当時は「不治の病」と恐れられていた肺結核になったのではないか、と思ひ込む。医者もそれらしいことを言う。武者小路は「自分は今迄にあまりに未熟な作を多くしてゐたことがはっきりする。（中略）自分は価値のない作家として一生を終わらなければならない。このことはどう考へても耐へられない」と記す。武者小路は友人のS（志賀直哉）とY（柳宗悦）が住む我孫子に妻と移り住むことにした。結局、セカンドオピニオンの結果、肺結核でないことが分かり、安心した武者小路は最後にこう結ぶ「新らしき家に祝福あれ」。「新らしき家」は直接的には我孫子のすまいを指すのだろうが、文学と理想の世界を追求する、作家として生きていくことの決心のことでもあるのだろう…。鳥肌がたつ、良い文章だ。

▶「新らしき家」には、興味深い武者小路と妻のやり取りがある。

自分は寝ながらヨヂミをぬってもらはうと思った。妻は台所で働いてゐた。「おいヨヂミをぬっておくれ」「なんですか」「ヨヂミだ」「何に？」「ヨヂミ」…「鼠ですか？」「馬鹿！ヨヂミだ。肩が痛いのだ」と妻との夫婦漫才的な？！軽妙なやり取りが面白い。

▶でも「ヨヂミ」っていったい何だろう？耳なじみがない言葉だ。早速インターネットで検索しても文字化けした何か、韓国風お好み焼きではありませんか？くらいしかヒットしない。特許庁の「特許情報プラットフォーム」で商標登録を調べて見ても、新聞各社のデータベースで過去記事・紙面検索を行ったが、広告を含めてヒットはしない。

▶塗り薬ということはガラス瓶に入っているのだろうな、ということぐるぐる考えて思い出した！そうだ「ヨヂーム丁幾」というガラス瓶があった！前に我孫子市内の遺跡から出土した遺物にあった！

▶出土した「ヨヂーム丁幾」の瓶の大きさは高さ6センチ、底径2.5センチ。型に彫られた文字が反転し「ヨヂーム丁幾」と浮き出している。ガラスの中には細かい泡がたくさん含まれ、年代的には概ね明治末から昭和初期といったところだろうか。

裏面へ続く…

▶「ヨヂーム丁幾」は「ヨヂームチンキ」と読む。この薬を作った会社は「ヨヂミ」同様、検索しても分からない。ただ「ヨヂウム」に関しては昭和13（1938）年1月12日の東京朝日新聞に「しもやけの豫防（かるいうちならヨヂウムを…）」という記事には「沃度丁幾（ヨヂウム）」とあり、「ヨヂーム」＝「ヨードチンキ」であることが分かる。

▶日本の医薬品の規格基準を定めた「日本薬局方」（明治24（1891）年）によると、ヨードチンキはヨードをアルコールで溶かしたものと定義される。

▶筆者の年齢がバレるが、今から50年ほど前の「昭和中期」にはヨードチンキ（ヨーチン）はどこの家庭にもある常備薬だった。切り傷、擦り傷にはヨーチンか赤チンを取りあえず塗っておく…職場の若手に聞いたら『『三丁目の夕日』で見たことがある』、ということでした…。いかん、いかん、ノスタルジーに浸るところだった。

▶ヨードチンキは、大正10（1921）年に牧野民蔵が刊行した『牧野沃度之説明』によると「結核、肋膜炎、喘息、肺炎、流行性感冒、梅毒、淋病、糖尿病、等々」への使用法と効果が述べられている。つまり、私たちが知るよりはるか以前、ヨードチンキは「結核を含む万能薬」として捉えられていたらしい。

▶結核は都市化や工業化など、人が「密」になるとともに広がる病気だ。歴史的に見て、日本人の死因のうち潜在的に多いのが肺炎や胃腸炎といった感染症だが、大正時代以降結核による死者は毎年10万人以上にのぼる。「白樺派」は当時、若者を中心に読者をもった新しい時代の到来を告げる文学者集団だが、彼らはまたリアルな死への恐怖と隣り合わせだった。だからこそ、武者小路のように与えられた生を作家として生き尽くす決心ができたのであろう。

▶武者小路は、「ヨヂミ」が「少しはきゝめがありさうに思った。」というから、本来的な肺結核の治療薬などとは思っていない。藁にもすがる気持で「ヨヂーム丁幾」のような小瓶からヨードチンキを肩に塗ったのだろうか。「ヨヂーム丁幾」の泡だらけの小瓶を手にとると、武者小路の絶望とそして希望が透けて見える、ような気がするのだ。



（辻史郎） ビンには「ヨヂーム丁幾」と書かれている。

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

五号雑感（編集後記）

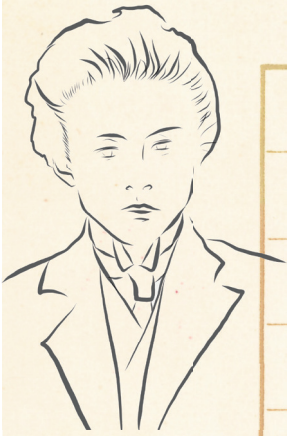
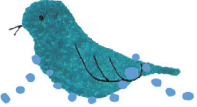
●去年、どら焼きの起源を調べたとき、どら焼きが看板商品のお店の懸け紙が武者小路実篤で驚きました。彼も甘いもの好きだったようですね●楚人冠が書いたメロン（マスクメロン）はそのお店の近く（？）にある新宿御苑が発祥の地です●昔、「菓子」は「果物」を指しました。すると、今回の『我孫子通信』は果物からお菓子まで、はたまた人の気持ちまで、幅広い「甘いもの」をご紹介できたのではないのでしょうか。（K）



テーマは「甘いもの」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



我孫子に住んだ白樺派は皆長生きだと思ふ。特に志賀直哉、武者小路実篤などは八八、九〇で亡くなっているから、エピソードも数多く残されているといえる。

武者小路の三女、辰子の『ほくろの呼鈴 父実篤回想』（一九八三）によれば「父はお酒も煙草ものまない」「食べることは、あまり重視しないという感じがする」らしいが、甘い物が好きだったようだ。きんつばのエピソードがみられる。

一方志賀はどうだろうか。最近お付き合いのある山田裕氏（志賀直哉御令孫）とお話しする中で、終の棲家である渋谷常盤松の家には毎日のようにお客が来るために、今日のお菓子はということでもよく近所の和菓子屋が来ていたということだった。

柳宗悦、民藝は食とは切り離させない。「用の美」としての器たちはそれに盛られる料理、食材たちをより一層引き立て、美味しさを増すものと思う。銀座あけぼのというお店がある。HPを見てみると「味の民藝」というお菓子の店がある。「手仕事、伝統的な手法、人を想い丁寧に、長い時間の中で洗練されていくこと、そして土地の材料を尊ぶこと。そんな「民藝運動」には、私たちのおかき作りへの想いと共鳴しあうものがありました。人々の生活に寄り添い、いつもより少し豊かな、手の届く贅沢。そんなお菓子の民藝品でありたい。」と述べている。包装紙には、染色家芹澤銈介の春夏秋冬の文字を使っているそうだ。昨年、平成から令和へと変わる十連休を稲村雑談連続講演で乗り切り、休暇として向かったのが青森だった。旅の大きなテーマは太宰治、そして板画家棟方志功だった。小学校からの友人と青森県立美術館を訪れた際に、確か各種お菓子屋さんなどの包装紙の展示を目にした。よくよく調べると神戸亀井堂の瓦せんべい、新宿中村屋のほか多くの企業でデザインを使用していたことを知った。

美味しいお菓子には、素敵なデザインあり。素敵な本には素敵な装幀あり。この我孫子通信にも随所にデザインへのこだわりを感じる。引き続きこの通信を楽しんでいただけるよう努めていきたい。（稲村隆）

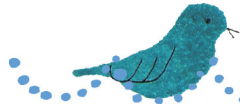
「ラム」我孫子から」について

志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

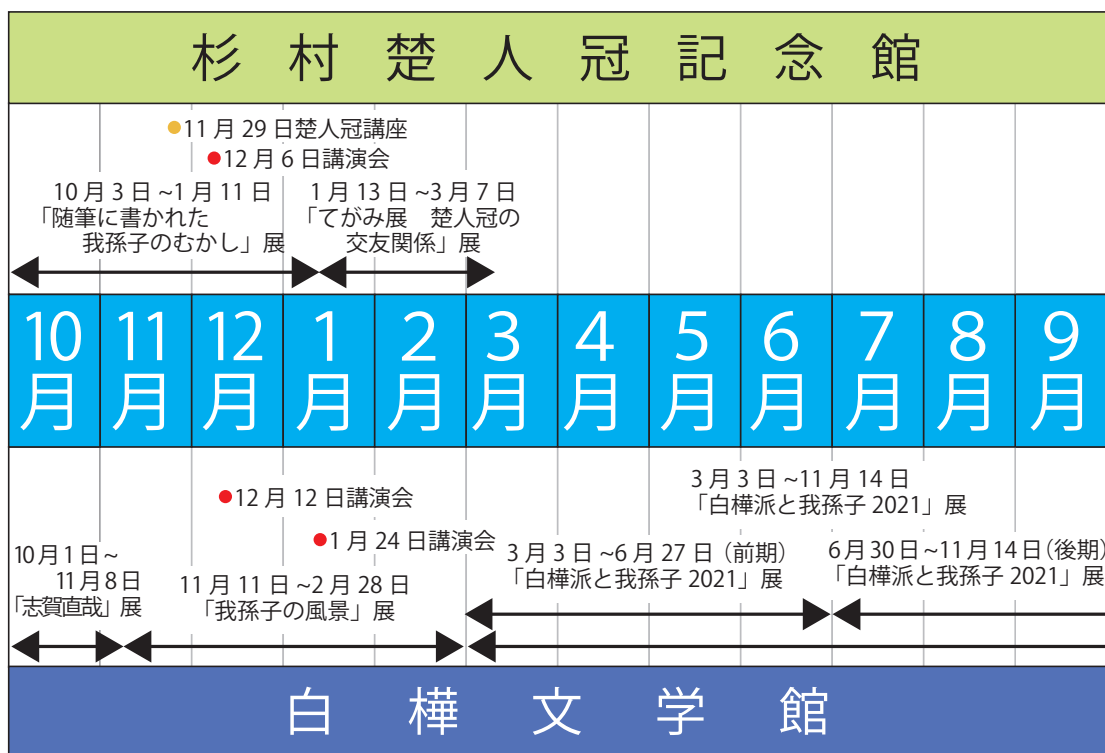
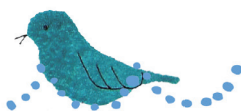
一九一五（大正四）年七月、杉村楚人冠は世界新聞大会に参加するためサンフランシスコにいました。世界の名だたる新聞記者たちを前に新聞について一席語るとあって、英語にも新聞にも精通した楚人冠といえど、流石に緊張を感じていました。講演を終え重圧から解放された楚人冠、思う存分飲んでホテルに帰ってきました。するとそこに、電話があつた旨の伝言。メモされているのは相手の滞在先ホテルの部屋番号だけ。ともかく電話をかけます。「どなたです？」「あててごらん！」。なんと若い女性の声。「あてたらお茶三杯おごるわ」。すっかり参ってしまった楚人冠ですが、相手の正体は、半年前第一次世界大戦取材の帰途にシカゴから横浜まで、偶然同じ列車、汽船に乗り合わせたフランス人の女性でした。彼女は戦争で故郷に帰れなくなり、子守などの仕事をしながら、世界中を旅していました。

その後、彼女を夕食に招いた楚人冠。デザートのカンタループを見て、サンフランシスコのホテルならではだ、としみじみ感じます。カンタループは日本にはない品でした。それに、自分がフランス人の若い女性と二人で食事していてもじろろ見えていくものがないなんて、日本では考えられない。そして、单身世界を飛び回るような、こんな女性も日本では考えられない……。日本では食べられないカンタループを見ながら、自分が世界を飛び回る若い女性と二人きり食事をしていることも、どうしたって日本ではありえないことだ、という感慨にうたれたわけです。

さて、問題はこのカンタループです。このエピソードを書いた「其の女」（『虫のぬどころ』所収）は私の好きな一篇なのですが、カンタループがわからず、せつかくのこの場面の情景がピンとこなかったのです。実は、カンタループはメロンの一種です。日本では、これと別系統のメロンが売り出されるのが大正年間のことですので、この頃はほぼ見かけない食べ物でした。メロンの甘い味を想起すると、なるほど、楚人冠にとって彼女との食事がこの味とともに大切な思い出になったのだな、と納得されます。……という、あま〜い話でした。（高木大祐）



イベント情報



■白樺文学館

11月11日(水) ~ 令和3年2月28日(日)

『白樺』創刊110年記念 市制50周年記念「我孫子の風景展」

志賀直哉たち白樺派が去った後の我孫子は、原田京平を中心とする春陽会の若手画家たちによる風景を描く時代を迎えます。「我孫子・白樺派」を継ぐ者原田京平の我孫子の風景画を中心に、大正から昭和30年代までの我孫子の風景画を紹介する展覧会です。

令和3年3月3日(水) ~ 11月14日(日)

常設テーマ「白樺派と我孫子2021」前期

白樺文学館所蔵の白樺派の人々(柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤)の作品、原稿、書簡などを展示します。

前期：旧白樺文学館コレクションを中心に 6月27日(日)まで

後期：山田家コレクションを中心に 6月30日(水) ~ 11月14日(日)まで



柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料 (入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによる BGM 演奏を開催しています。11 時～か 13 時～どちらか 1 時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は 35 名。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧くださいだけです。

朗読・ピアノイベント「白樺の調べ」

参加費:無料 (入館料のみ)

白樺派に魅せられた朗読・ピアノ市民スタッフと、学芸員がお送りする小劇場。

※当面の間、開催を見合わせます。

学芸員 (楽藝人) ギャラリートーク「稲村雑談」

参加費:無料 (入館料のみ)

志賀直哉の熱海での雑談記録「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説です。

※当面の間開催を見合わせます。

講演会 12月12日(土) 午後2時から 生涯学習センターアビスタホール

市制 50 周年・我孫子を知る 1 年「稲村雑談 特別版—我孫子を描きし画家 原田京平—」

講師 白樺文学館学芸員 (楽藝人) 稲村 隆

志賀直哉の熱海での雑談記録「稲村雑談」にあやかり、同名の学芸員による展示解説が、今回は特別版として講演会としてお送りします。

講演会 令和3年1月24日 午後2時から 生涯学習センターアビスタホール

市制 50 周年・我孫子を知る 1 年「我孫子の風景を読む—志賀直哉たちが見た我孫子の景観—」

講師 小山泰弘氏 (長野県林業総合センター林業専門技術員 農学博士)

志賀直哉をはじめとする白樺派の人が観て感じていた 100 年前の我孫子の風景を、原田京平の風景画から読み解くとともに、50 年を迎えた我孫子市政で形成された景観の未来を樹木の目線から想像していければと思います。

【講演会共通】

開場 午後 1 時 30 分から

定員 50 人 (要予約 [11 月 16 日受付開始]・先着順)

予約受付 年間パスポート所持者限定先行予約 10 月 16 日 (金) 予約開始

白樺文学館 (電話:04-7185-2192)



10月3日（土）～令和3年1月11日（月・祝）

企画展 市制50周年・我孫子を知る1年 「随筆に書かれた我孫子のむかし」

市制施行50周年を機に、我孫子のむかしに目を向けてみよう、という展示です。杉村楚人冠は身近なところに題材をとる随筆を得意としていました。おかげで、我孫子のむかしの様子が多く書きとめられているのです。そこで、楚人冠の随筆を材料に、当時の写真と、我孫子市所蔵の民具を加え、むかしの我孫子のくらしを浮かび上がらせてみます。

第8回楚人冠講座 11月29日（日） 午前10時から生涯学習センターアビスタホール

市制50周年・我孫子を知る1年 「楚人冠が書きとめた手賀沼の姿」

講師 杉村楚人冠記念館担当学芸員

杉村楚人冠はじめ、多くの文人が我孫子に集ったのは、手賀沼の景勝があつてこそです。なかでも、当時の手賀沼の姿が最も多く書き残されているのは、杉村楚人冠の随筆でしょう。その文章を市民図書館市民スタッフの朗読で味わい、学芸員の解説で理解を深める、楚人冠の随筆を二重に楽しみながら、手賀沼の魅力を知ることができる講座です。

定員 50人（要予約 [11月1日受付開始]・先着順）

予約受付 市民図書館アビスタ本館（電話：04-7184-1110）

杉村楚人冠記念館（電話：04-7182-8578）

※先行予約期間終了後は、図書館での一般受付のみとなります。

講演会 12月6日（日） 午後2時から 生涯学習センターアビスタホール

市制50周年・我孫子を知る1年 「行商の時代」

講師 山本志乃氏（神奈川大学国際日本学部教授）

昔から成田線・常磐線を利用している方には懐かしい、「行商」という言葉の響き。我孫子市の歴史を語るには欠かせない行商について、学んでみませんか。日本にはどんな行商があつたのか、そのなかで、湖北地区を中心とした我孫子の行商の特徴はどんなものか、女性の商いや行商に詳しい山本志乃さんにお話しいただきます。

定員 50人（要予約 [11月1日受付開始]・先着順）

予約受付 杉村楚人冠記念館（電話：04-7182-8578）



お知らせ 『続々湖畔吟 現代表記版注解付』を刊行します

杉村楚人冠記念館では、今では入手困難な杉村楚人冠の著作の再刊を進めています。

『続々湖畔吟』は『アサヒグラフ』の連載随筆をもとにした単行本の3冊目です。「湖畔吟」の由来は「湖畔＝我孫子の生活を吟じる」ということですから、我孫子には縁の深い随筆です。再刊にあたり、現代表記に改めて読みやすくしたうえ、文章の背景となる当時の出来事や基礎知識を注解として加えることで、より理解しやすくしています。

これで「湖畔吟」シリーズ3冊が完結することから、付録として「湖畔吟現代表記版注解付シリーズ総目次・総索引」もついています。ぜひお買い求めください。

■ 2館共通のお知らせ

YouTubeで白樺文学館と杉村楚人冠記念館の魅力を伝える番組を配信します！

我孫子インフォメーションセンター「アビシルベ」のYouTubeチャンネルで我孫子の魅力を紹介するために、「我孫子を愛した文人たち」と題しシリーズ化し動画を配信します。

また、閉館中に予定していた対談を「稲村雑談特別版」として収録しました。タイトルは「ふたりのナオヤ 志賀直哉と山田直矢」。こちらも併せて配信予定です。

●シリーズ「我孫子を愛した文人たち」（各館全10回、1回10分程度）

◎白樺文学館

内容 なぜ白樺派が集まったのか？をテーマに、白樺派とは何か、白樺派の代表的人物である志賀直哉や柳宗悦、武者小路実篤と我孫子の関わりなどについて語ります。

◎杉村楚人冠記念館

内容 ジャーナリスト・杉村楚人冠について、彼の功績や石川啄木、夏目漱石などをはじめとする交友関係、我孫子での生活の様子などについて語ります。



番組は12月1日からこちらのQRコードでご覧いただけます

■ 歴史文化財担当からのお知らせ

① 講演会 11月14日（土）午後2時から 布佐中学校 多目的室

市制50周年・我孫子を知る1年「我孫子の民俗行事—布佐竹内神社例大祭を中心に—」

② 講演会 11月28日（土）午後2時から 生涯学習センターアビスタホール

市制50周年・我孫子を知る1年「我孫子の民俗行事—布佐竹内神社例大祭を中心に—」

講師 伊藤純（川村学園女子大学講師）

今年市指定文化財になった竹内神社例大祭を中心に、我孫子市で行われている民俗行事であるオビシャや去年我孫子市指定文化財となった我孫子発祥の待道講を紹介します。豊かな民俗をとおして、これからの文化を一緒に考えていきましょう。

【講演会共通】

定員 50人（要予約・先着順）

予約受付 文化・スポーツ課（04-7185-1583）

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。



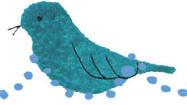


我孫子通信

文人の郷だより

令和3年冬号

通信第二



辻説法

館長のつぶやき



第4回 武者小路実篤の「住宅間取速成用器」をめぐって

▶前回、武者小路実篤が我孫子に移住した顛末^{てんまつ}について記した「新らしき家」（大正5（1916）年10月1日発行の『新潮』に発表）について、「ヨヂミ」という薬にまつわるあれこれを記した。この小説を読んでいて更に気になる言葉に目が留まった。

▶「二人はその後「住宅間取速成用器」と云ふものを取りよせて暇があると家の間どりに苦心した。自分は頭がわるいと云ふ口実をつくって一日家の間どりに苦心したこともあつた。そしていゝ考はないので腹を立てた。そしてお互に非難しあつた。」とある。この「住宅間取速成用器」とは一体何だろう？

▶明治時代は、西洋の考え方を日本に取り入れるのが課題だったが、大正時代になると、西洋と日本という価値観の衝突を越えて、新たな文化を創造する活動が活発となる。「白樺」はその象徴的な存在である。人々の住まいも同様で、橋口信介が興した「あめりか屋」はアメリカ住宅の輸入販売に始まり、「住宅改良会」を立ち上げ、居住者の目線で生活を改善するためには住まいを変えることが必要であることを説いた（内田青蔵1987『あめりか屋商品住宅』）。この会の機関誌『住宅』は奇しくも大正5年創刊である。

▶武者小路夫妻が取り寄せた「住宅間取速成用器」もきっと白樺派らしく、新しい考え方に基づく便利グッズ？なのだろう、と思い、早速ネット検索するがヒットしない。

▶そこで朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」の過去記事・紙面検索してみると、大正5年8月14日、9月12日、10月26日に「住宅間取作成用器」の広告が掲載されていた。

▶「新らしき家」が9月11日に脱稿しているので、8月14日の広告内容を書き起こす。

「明田川政文先生考案 発行所 東京神田区表神保町十番地 振替口座東京二六四一二番昌文堂書店 家屋建築 住宅間取速成用器

附録 家相吉凶秘訣一覧表 一枚 吉相住宅間取実例圖 二枚 磁針器 一個 全部箱入り一組 特價金壹圓參拾錢

住宅の建築又は模様替をせむとせらるゝ各位は先づ速に本器を利用せらるべし。其使用法頗る簡単にして何人もよく即時考案し得られ尚幾回となく變更し得殊に執筆圖引の手敷を要せず眞に理想的斬新器なり。更に實際方面に留意したる模範的家屋建築圖は座敷、庭園、土蔵、勝手向等夫々位置を示して遺憾なし。世に

裏面へ続く…

家相として昔より其の住宅の建築、間取、方角によりて其の家庭に起る吉凶を左右せらるといふ事あり依て周到懇切なる著者は本器に^{かん}關するに右に掲げたる附録を以てす。適意の間取を選び、凶災を避け吉福を求めんとせば^{すべか}須らく本器一組を座右に備へて良□を講ぜられよ。(電話にての御注文は京橋二九九番へ)」

▶要は明田川政文による「家相」を占う発明品らしい。さらに調べると、この人物は方位学、家相、運勢の専門家であった(『人一代の運勢』大正2年)。

▶江戸時代までは、家を新築する際には必ずと言って良いほど家相を占い、「家相凶」を作る。また行動を起こす際には、方位や日取りを占っている。しかし明治以降は「淫祀邪教の類」(根拠のない、いかがわしいもの)として否定され、表立っては語られなくなる。

▶「住宅間取速成用器」の実物が不明なので何とも言えないが、明田川政文の著作を見ると、「住宅改良会」のような、新しい考えを反映させたものとは到底思えない。これだけ見れば、武者小路夫妻は因習と伝統に基づく部屋配置を検討した、と考えられる。

▶一方、実篤の妻、房子への聞き取り調査によると、この家は「私(房子)が設計して建てた」との証言がある(品田制子1989「妻たちが見た「白樺派」の我孫子生活」『我孫子市史研究』13)。武者小路実篤の自伝的小説「或る男」(1921~23)にも「妻が凶を書いた」とあって、「新らしき家」とは若干ニュアンスが異なる。房子は平塚雷鳥の「青鞥社」にも出入りする「新しき女」であり、因習めいた家相や方位を重視するとは思えない。さて、どのように家づくりを進めたのだろうか?

▶もう一度「新らしき家」の文章を読み返してみよう。「二人は」とあるから、夫婦二人で「住宅間取速成用器」を使って、家相や方位を念頭に置いて家づくりをスタートした。しかし二人の意見はなかなか合わず、実篤は「自分は頭がわるいと云ふ口実をつくって一日家の間どりに苦心」とあるから、「どうせ俺は頭が悪いから、お前の言う事が理解できないんだ」と捨て台詞(筆者妄想です)を吐いて部屋に引きこもってプランを練り直し、そして「お互に非難しあつた」、という流れが浮かんでくる。

▶それでも最後は夫婦で折り合って、「新らしき家に祝福あれ」と結んでいる。家長が万事決定するのではなく、夫婦で問題を解決する、これが白樺派的な新しい価値観の創造なのかもしれない。

▶また、江戸時代までの間取は、家の格式や地域の決め事に従ってかなり定型的で、迷う余地はない。明治になって、間取を自由に決めて良いとなると、かえって迷うのが人の常である。それを解決する「住宅間取速成用器」という「便利グッズ」が新聞で通信販売されるというのが、大正時代らしいなあと思うのだ。

(辻史郎)

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角(=辻)で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

五号雑感(編集後記)

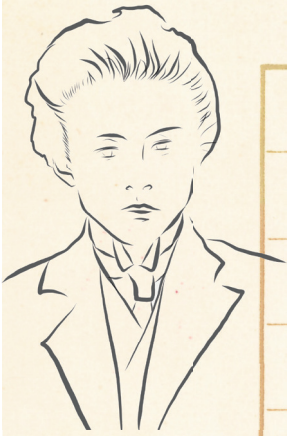
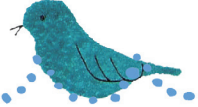
●Go To トラベルにかけてお題を「旅」としました。●楚人冠の『続々湖畔吟』「まはり道」には、毎日の通勤が「旅」になるヒントが隠されていると思いました。ぜひ、記念館で出版している『続々湖畔吟』でお楽しみください(K)



テーマは「旅」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



志賀たちを理解するために「旅」は欠かせないものだ。志賀のゆかりの地めぐりをするたびに思うのは水辺が多いことである。我孫子は手賀沼沿い、尾道は瀬戸内海を一望し、京都山科に至っては、大きな池があった。柳も全国各地の民藝発掘のために旅をし、武者小路も新しき村のために土地探しの旅をしている。現在開催中の我孫子の風景展の主人公、原田京平も各地を旅しては、風景を描き短歌を読んでいる。ひとつ短歌を紹介したい。

「三井寺にて ならび立つ老樹たいまきが下のうすぐらく苔の香立てて春の雨降る」

おそらく京都に移住した志賀を訪ねて、山科を訪れた際、三井寺も回ったのではないかと想像している。またそこは大津。柳が評価した民画「大津絵」もこのあたりであり、現在でも大津絵の店がある。（文学館でも仕入れて販売中）こうして今もなお彼らの足跡を想い、「旅」をすることで、さまざまなお会いを得ることが出来る。

また志賀たちにとってみれば、我孫子も人生という旅の地と考えた時、多くの刺激をここで受けたかを思わずにはいられない。「思想の暗示やその発展に、自分はどれだけ此我孫子の自然や生活に負ふた事であらう。静かなもの寂しい沼の景色は、自分の東洋の血に適ひ、又東洋の思想を育てるに応はしかつたと自分は思ふ。」と柳は記している。これこそがタイトルにある「我孫子から」の一文である。良き友、穏やかな風景に囲まれて思索、創作に取り組んだことだろう。流行病の拡大で、再び安心して「旅」をすることが遠のいている。せめて文学館で原田の風景画から、百年前の我孫子の風景へタイムスリップして、時空の「旅」を想像してほしい。令和二年は慌ただしくも静かに過ぎた。今年は今うすこし落ち着いた旅に出たいものである。

（稲村隆）

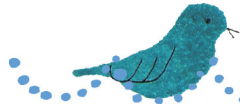
志賀直哉用紙

「ラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

杉村楚人冠の友人に土岐善磨という人がいます。ローマ字三行書きというセンサーシヨナルな短歌集『NAKIWARAI』を哀果の号で発表し文壇デビューを果たした歌人であり、新聞記者として楚人冠の後輩でもありました。その土岐がヨーロッパ巡遊の紀行をまとめた『外遊心境』という本に楚人冠が序文を寄せています。

土岐善磨がいうとうそこら中すいたところを歩きまはって、帰って又いうとうと「外遊心境」などを書いてゐるのは、いまいまでも羨ましい至である。その心境を集めて書物にするから、その序文を書けなどいはず、に至っては、羨ましくもいまましい次第である。何が序文だ。馬鹿。

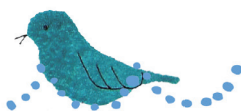
楚人冠は何を怒っているのでしょうか？ 実は、怒っているのはポーズだけ、自分は海外に出ても用を済ませて帰ってくるしか能がないが、土岐は用のない所にも用を見出せる男だ、と褒めているのです。しかし、楚人冠の実績を考えるならば、用のある旅、何らかの使命を帯びた旅こそ、ジャーナリストとしての真骨頂ではなかったでしょうか。

楚人冠が最初に経験した特派の旅は、明治三九（一九〇六）年東北地方の凶作地を廻る旅でした。学校に通えない子どもたち、食べ物もないなか病を抱える老人たち、わずかな稼ぎで彼等を支える家人の姿……。楚人冠の通信は貧困を生きる人びとの姿を伝え、義捐金を通じた新聞社の社会活動に貢献しました。そして翌年、イギリス特派では通信で好評を博し看板記者の地位を固める一方、そこでタイムズ社の索引部を見た経験の後年日本初の調査部創設につなげ、記事アーカイブの先鞭をつけます。昭和九（一九三五）年と十年、楚人冠が秋田県湯瀬温泉の関直右衛門に誘われ八幡平の巡遊をし『アサヒグラフ』で紹介したことは、楚人冠が落馬して骨を折った場所として有名になるというハプニングもあつたものの、八幡平の観光開発の第一幕に登場する出来事であり、このとき命名に関わつた玉川温泉は今や誰もが知る湯治場となっています。楚人冠の「使命を帯びた旅」は社会に影響を与えた、といつても過言ではないのです。

（高木大祐）



イベント情報



杉村楚人冠記念館											
1月13日～3月7日 「てがみ展 楚人冠の交友関係」展		3月9日～5月9日 「観光案内と地図で見る 楚人冠の旅」展		5月11日～5月14日 臨時休館		5月15日～7月11日 「楚人冠の本棚 楚人冠のジャーナリズム文庫」展		6月12日楚人冠講座			
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
11月11日～2月28日 「我孫子の風景」展		3月3日～6月27日(前期) 「白樺派と我孫子2021」展				6月30日～11月14日(後期) 「白樺派と我孫子2021」展					
白樺文学館											

■白樺文学館

令和2年11月11日(水)～令和3年2月28日(日)

『白樺』創刊110年記念 市制50周年記念「我孫子の風景展」

志賀直哉たち白樺派が去った後の我孫子は、原田京平を中心とする春陽会の若手画家たちによる風景を描く時代を迎えます。「我孫子・白樺派」を継ぐ者原田京平の我孫子の風景画を中心に、大正から昭和30年代までの我孫子の風景画を紹介する展覧会です。

令和3年3月3日(水)～11月14日(日)

常設テーマ「白樺派と我孫子2021」前期

白樺文学館所蔵の白樺派の人々(柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤)の作品、原稿、書簡などを展示します。

前期：旧白樺文学館コレクションを中心に 6月27日(日)まで

後期：山田家コレクションを中心に 6月30日(水)～11月14日(日)まで

柳兼子愛用ピアノ BGM 演奏

参加費:無料(入館料のみ)

開館日は毎日市民スタッフによるBGM演奏を開催しています。11時～か13時～どちらか1時間程度の開催です。市民スタッフの登録者は35名。毎日来ても違う方の演奏で展示をご覧ください。



■杉村楚人冠記念館

令和3年3月9日（火）～5月9日（日）

企画展 「観光案内と地図で見る楚人冠の旅 ～欧米編」

平成31年度に開催してご好評をいただいた「観光案内と地図で見る楚人冠の旅」、今回は「欧米編」です。1907年ロンドン、1908年朝日世界一周会、1914～15年第一次世界大戦、1921年ハワイ世界新聞大会と、杉村楚人冠が海外に特派された際に蒐集した観光案内や地図に、一部関連資料を加えて、楚人冠の海外への旅の様子をうかがえます。思いがけず海外旅行が困難になったご時勢、100年前にタイムスリップしての空想旅行はいかがでしょう。

令和3年5月15日（土）～7月11日（日）

テーマ展示「楚人冠の本棚 楚人冠のジャーナリズム文庫」

今回のテーマ展示は久しぶりの「楚人冠の本棚」シリーズです。今回は、個人のコレクションとしては非常にユニークな、新聞・ジャーナリズム関係の書籍コレクション、楚人冠が蒐集していた「ジャーナリズム文庫」をご紹介します。楚人冠のジャーナリズムに関する深い知識を支えた、欧米のジャーナリズム史についての書籍や、東京朝日新聞の多士済々の同僚たちの著作などを展示します。

7月13日（火）～10月10日（日）

企画展「弱者へのまなざし —幸徳秋水・堺利彦・杉村楚人冠の交流—」

大逆事件で社会主義を恐れる権力に命を奪われた幸徳秋水、秋水亡き後の社会主義者たちを支えた堺利彦、そして彼らの理解者であり、利彦が亡くなるまで折に触れて支援を惜しかなかった楚人冠。弱者に向けるまなざしを背景に、彼らの交流を描きます。幸徳の無実を伝えるため獄中から管野須賀子が出した針文字書簡、判決の日の新聞社の様子を回想する石川啄木の書簡、幸徳を監視する警察の様子を、楚人冠の記事をモチーフにして取り入れた場面がある「それから」を刊行したときの夏目漱石の書簡、貴重な資料を出し惜しみなく一気に展示します。

第9回楚人冠講座 6月12日（土）生涯学習センターアビスタ第二学習室

「楚人冠の人と作品」（仮）

定員 25人（要予約 [5月16日9時30分受付開始]・先着順）

予約受付 市民図書館アビスタ本館（電話：04-7184-1110）

年間パスポート先行予約 5月1日～15日 杉村楚人冠記念館（電話：04-7187-1131）

※先行予約期間終了後は、図書館での一般受付のみとなります。

今回の楚人冠講座では、杉村楚人冠がジャーナリストとしてどのような経歴をたどっていったのかわかるように、東京朝日新聞入社以降の作品から、楚人冠の仕事ぶりを象徴するようなものを選び、古い物から順に読んで行きます。これで楚人冠が近代ジャーナリズムの確立に果たした功績がわかります。

※イベント情報は最新のものになるよう心がけていますが、今後の情勢次第で白樺文学館・杉村楚人冠記念館の展示会期は変更する可能性があります。お越しの際は、お問い合わせもしくは、市のホームページにて最新の情報をご確認ください。

